

RYOKAN'S REQUIEM, ETC

良寛の遺偈など

(a) 富田義介

I

良寛の遺偈

うらを見せ

おもてを見せて

ちるもみち

Ryokan's Requiem

Now Showing its backside*

And now upside*

A tinted leaf went falling down.

* Pronounce these words with accent on
the second syllable.

| × ㇇ | × ㇇ | × ㇇ |

| × ㇇ | × ㇇ |

| × ㇇ | × ㇇ | × ㇇ | × ㇇ |

④ <底のない桶>=**<脱底桶>**の様に、或いは**<不繫舟>**の様に、吹く風のまにまに境を移して *care-free* な、*fancy-free* な、運を天真の仏に任せてまことに自由自在な生きがいの有る人生をもつことができた。いうなれば、わしが一生は、木枯らしの風に吹かれて、うらを見せ、表を見せてひらひらと、ひるがえり、ひるがえり、落ちてゆく一枚の美しいもみじの葉のようなものであったという意味。蕪村の名句<底ノナイ桶コケアルク野分カナ>と較べてみる事。

(b)

生涯懶立身 生涯身を立つるに懶く^{もろ}
騰騰任天真 騰騰天真に任す
囊中三升米 囊中に三升の米あり
炬辺一束薪 炬辺に一束の薪あり
誰問迷悟跡 誰か問はん迷悟の跡
何知名利塵 何ぞ知らん名利の塵
夜雨草庵裡 夜雨草庵の裡
双脚等閑伸 双脚等閑に伸ばす

Ambition — I've not any,
But as cloud and air I'm free,
For I've a bagful of rice
And armful of fagot to hand.
Who cares for self and pelf?
Who cares for tallied or not?
Of a rainy night I lie,
With legs astride, in my cot.

× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ ×
× × ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ
× ㄥ	× × ㄥ	× × ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ
× × ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ

⑩ この詩の大意は、遺偈の句と同じ。〈騰々任天真〉とは己れの計らいを捨

てて 捨てて、捨てきって無念無想、無為無作、無欲無我の妙境に入り、只々天然の傾斜、即ちイデアの線に沿うて、自分に与えられた人生を油然として湧き上って来る井戸の水の如く非連続的に連続する生きがい＝生の悦び＝価値創造のために費したいもの。それがためには自分の心を常に澄明にして天真の＝法然の＝絶対者の声なき声に耳をかたむけて居なくてはならない……ということ。天真を人格化して禪門では天真仏とも阿弥陀仏 Mitábhā とも言う。

(c)

な に ゆ え に
 家 を 出 で し と
 を り ふ し は
 こ こ ろ に 愧 じ よ
 す み ぞ め の 袖

“O shame!” says a sternest voice.
 “What made you quit your home?”
 Bet your robe and tell me what.”
 “Ye pardon me,” begs a voice.
 “I’m sinner, coward, and things.”

× ㄥ	× × ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× × ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ

㊦ 良寛は俗名山本栄一、生れついでにの口腔性格者であった。＜テムバソニ酒ニ山葵（ワサビ）ニタマハルハ春ハ寂シクアラセジトナリ＞と歌い、＜ケサハワサビ給ハリ、ウヤウヤシク納受仕り候。定珍老＞と礼状を認める男、そして舌なめずりする男はフロイドのいう口腔性格者にきまって居る。口腔性格者は食べる事、人にも物にも馴じんでこれに親しむことが大好きな人間なのだから、山本栄一にとって、弟の由之に、欠所にもなり兼ねない山本家の万事を託して、自分はドロンを決めて出家したという事は、後々までも彼の心を良

心の苛責に晒らすことになったのである。これが終生彼を苦しめた唯一つのコムプレクス＝両面価値的のコムプレクスとなったのである。彼が曹洞宗門の禪僧としては不似合なほど称名念仏に打ちこむ事となったキッカケは存外こんな所にあったのではなからうか。自力のはからいを捨てて、すべてを如来の手に任せ切りにしたかったのである。己れを空しくして―<底の脱けた桶><繋がれざる舟＝不繫舟（良寛の言葉）>のように吹く風にまかせて西へ東へ動きまわりながら<自然法爾じねんほうに>すなわち<法然>すなわち<天真>に任せて己れめは無為無作（ナンニモンナイ）で<天真仏>＝<阿弥陀仏>に帰命頂礼して、すべての罪と罰と責任とから自由な、法悦にあふれた生活に入ろうと云うのが、山本栄一氏の念願であったのである。舎弟の由之がたまさかに国上山の兄の庵を尋ねて来ると<由之と酒を飲んで楽しみ甚だし>と題する次のような詩を作った良寛である。

兄弟相逢う処 共に是れ白眉垂る
 且らく喜ぶ太平の世 日々酔ひて痴の如し
 栄一氏の心遣りを思うと、涙なくしては読めない詩である。

(d)

く さ の い ほ に
 ね て も さ め て も も う す こ と
 な む あ み だ ぶ つ
 な む あ み だ ぶ つ

Day and night I say
 In my cot bethatched
 'O Mitábha-Mitábha!'
 Praising the Holy name.

ㄥ ×	ㄥ ×	ㄥ (×)
ㄥ ×	ㄥ ×	ㄥ (×)
ㄥ ×	ㄥ × ×	ㄥ ×
ㄥ × ×	ㄥ ×	ㄥ (×)

(e)

お ろ か な る

身こそなかなかうれしけれ
 弥陀のちかひに
 あふとおもえば

A moron, I guess, I'm lucky enough
 To fully share Mitábha's pledged grace.
 O happy, happy I'm indeed!

× ㄥ	× × ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ	
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	

(f)

青天寒雁鳴 青天に寒雁鳴き
 空山木葉飛 空山に木葉飛ぶ
 日暮烟邨路 日は暮れて烟村の路
 独掲空盃*帰 独り空盃を掲げて帰る

*盃は托鉢用の鉢の子（鉄鉢）である。

The sky was blue and clear
 with wild ducks honking high.
 The hills were windy and bare
 with tinted leaves off in whirls.
 I trailed home at dusk
 With empty bowl up in hands.

× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ

| × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |
| × ㄥ | × ㄥ | × × ㄥ |

(g)

城中乞食了 城中^{じま}食を乞ひ了って
得得携囊帰 得得囊を携へて帰る
帰来知何処 帰来知らず何れの処ぞ
家在白雲陲 家は白雲^{ほとり}の陲に在り

*次に何という疑問詞があるので知らズと訓む。

Just through with begging in town
Got home with heavy bag
To find nowhere my cot
Because of clouds o'er th' lot.

× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ

(h)

道 の べ に
す み れ 摘 み つ つ
鉢 の 子 を
忘 れ て ぞ 来 し
あ は れ 鉢 の 子

Bent on gathering
Roadside violets
I forgot my bowl,*

Dearest bowl behind!

* The mendicant's iron bowl for alms.

ㄥ ×	ㄥ × ×	
ㄥ ×	ㄥ × ×	
ㄥ ×	ㄥ ×	ㄥ (×)
ㄥ ×	ㄥ ×	ㄥ (×)

㊦ 良寛はその日常用いる品々を非常に愛惜し、鉄鉢などには<これはわしがこの、ほんにわしがの>と書きつけ、自分の名を書くことを忘れていた相である。まるで無償行為である。ドストエフスキーの作中の人物が追い詰められたぎりぎりドンゴのくらしの中に生き甲斐を開発するために演出する *acte sans raison* である。常識あるものの眼には甚だバカバカしい行いである。しかしこのような無償行為をしないでは生きるソラが無いと考える大愚(オオバカモノ)良寛の如き者こそ正しく人間性に徹した英雄的実存主義者である。

(i)

総為疎世用 総て世用に疎きが為に
 能得終身間 能く終身の間を得たり
 捫艾供酒錢 艾もぐさを捫ひねって酒錢に供し
 囲碁送残年 碁を囲んで残年を送る

A good-for-nothing I
 Could live an idle life,
 Could pinch moxa for drinks,
 Could play chess in closing days.

× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	(×) ㄥ	× × ㄥ
× × ㄥ	× ㄥ	× ㄥ

㊦ <人境両俱奪>の契機による三昧(cf. 10㊦)の作図を体験したことのある

禅者の作品であることに先ず着目するべきである。でない、道元のきびしさに較べて、何んと良寛のダラシの無さよ！という悪口が口を衝いて出る筈である。けれども因縁弁証法(ideo-topological dialectics)に由る人間実存の成長の歩みはアイデアの力とトボス(場)の論理の力と二本の脚の力によって運ばれるものであるから、各人の場の論理=各人の扱ふ行動を誘発する独自の環境というものを勘定に入れて考えないと、道元はエエけれど良寛めはタバコは吸うし、酒はのむし、おまけに俗人と暮もうつ、手におえない生臭坊主だという事になり兼ねない。心すべきことである。人はみな自分のペース—自分の扱んだ環境の論理に随って生きなければハラノイエスものだという事を忘れては不可い。もしも良寛が道元と同じペースで人生の旅を歩いたとしたら、それは日本文化にとって大きな損失となったであらう。二つの道元を持つよりも一つの道元と一つの良寛を持つことの方が何程かマシである。

(j)

歌 や よ ま む
 手 ま り や つ か む
 野 に や 出 で む
 心 一 つ を 定 め か ね つ つ

Make poems, shall I?

Play handball, shall I?

Or on a picnic, shall I go?

I know not which to choose indeed.

| × ㄥ | × × ㄥ |

| × ㄥ | × × ㄥ |

| × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |

| × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |

(k)

草 の 庵 に
 脚 さ し 伸 べ て
 を や ま 田 の
かはず 蛙 の 声 を

聞 か く し よ し も

Abed with legs bestretched
in my cot uphill,
O how I like to hear
the froggies croak
In th' rice paddies far and
near these days!

× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	× × ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	(×) ㄥ	× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ

(1)

世 の 中 に
まじらぬ と に は
あらねども
ひとり遊びぞ
われはまされる。

I meann't to shun
the folk all o'er,
But choose to live and play
my lease of life
Alone -- yea, all alone
in my cot.

× ㄥ	× ㄥ	
× ㄥ	× ㄥ	
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ

| × ㄥ | × ㄥ |
 | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |
 | × × ㄥ |

(m)

山 かげ の
 岩 間 を つ た ふ 苔 水 の
 か す か に
 わ れ は す み わ た る か も

Like limpid streaks of brook
 Among the rocks hillside
 I live, go by, through life,
 ne'er hitting dirt on th' way.

× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ

㊥ 10 ㊦ (b) の漢詩と共に良寛独自の行動環境の論理を端的に示す秀れた短歌である。これくらいはつきりと彼の人境兩つながら俱に奪わんとする *double negative* の姿勢を、そのダイナミックな美しさと共に、巧みに表現した短歌はおそらく外には無かろうと思う。(cf. 10 ㊦)

(n)

八月涼氣至 八月涼氣至り
 鴻雁正南飛 鴻雁まさに南に飛ぶ
 我亦理衣鉢 われも亦衣鉢をととのへ
 得々下翠微 得々として翠微を下る
 野菊発清香 野菊は清香を発し

山川多秀奇 山川は秀奇多し
 人生非金石 人生金石にあらず
 随物意自移 物に随って意自ら移る
 誰能守一隅 誰か能く一隅を守り
 兀々鬢垂糸 兀々*の鬢に糸を垂れんや

* <兀>は<尢>の俗字, ワウワウとよむべきで, ゴツゴツは不可。

諸橋: 漢和大辞典<兀>及び<尢>の項を参照せよ。

With cool the fall is come ;
 The ducks fly honking south ;
 With bowl and in robe I start
 Downhill along the trail
 Through daisies' balmy scent
 To dale and sight so fine.
 Ne'er be a rock and stay
 At a* scene in life
 Till th' hair turns shaggy grey.
 For life could change with scenes.

* Pronounce this *a* as *ei* accented and stressed.

× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× × ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	(×) ㄥ	× ㄥ
× × ㄥ	× ㄥ	× ㄥ
× ㄥ	× ㄥ	× ㄥ

(o)

李白賛

東風踏青罷 東風の踏青罷み
閑倚案頭眠 閑に案頭に倚って眠る
主人供筆硯 主人筆硯を供す
為題醉青蓮 為に題す酔青蓮

A Poem on Lipei

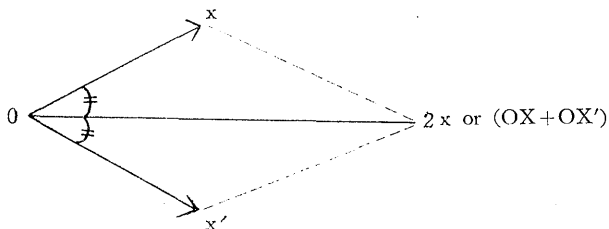
There came to stop and sleep
The vernal wind that'd walked
With me o'er grasses green.
On coming back I sat
At desk to fall asleep,
When, called on by th' host, I soon
Began to make a poem
To put on his picture of
Lipei well lit and asleep.

1 | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ | 7 | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |
2 | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ | 8 | × ㄥ | × × ㄥ | × ㄥ |
3 | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ | 9 | × ㄥ | × ㄥ | × × ㄥ |
4 | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |
5 | × ㄥ | × ㄥ | × ㄥ |
6 | × × ㄥ | × ㄥ | × × ㄥ |

② 蕪村の名句に〈底のない桶あるくこけ歩行野分哉〉というのがある (cf. 本稿9回)。
作者はその晩年に多くの禪書を読むうちに〈脱底とつ桶 (底のない桶)〉という禪門の古
語に会って強い感銘を受け、これに発想してこの句を制作したものに相違ないとこの

頃筆者は確信するようになった。同様にして乞食僧良寛上人 (1758—1831) も亦<臨濟四料簡>に関する禪書の説明を読むうちに<一 奪人不奪境 心と云ひ物と云ひ、人と云ひ境と云ふは、仮りに吾等の心識に分別せる偏見なり。故に一法を立すれば他法は自ら其中に摂し尽して一物も余すところなし。例せば一枚の紙の如く、表のほかに裏なく、裏のほかに表なし。古人が耕夫の牛を奪ひ飢人の食を奪ふと云へるは即ち此消息なり。> (cf. 禅宗辞典 p. 557) と云った風な註釈を良寛が発見したとするならば、<うらを見せ、おもてを見せて、ちるもみち。> という彼の遺偈の一句がここに発想されたものとする筆者の見解も亦架空のアイデアで無くなる筈である。何十年の間雲水修行をした良寛が<洞山五位>や<臨濟四料簡>というような名高い禅門の古語を知らないで居る筈がないのである。否々、俳人蕪村でさえ<(-)奪人不奪境(-)奪境不奪人(=)人境両俱奪(=)人境俱不奪>という臨濟四料簡の説を知らないで<底のない桶あるくこけ歩行野分哉>の名句を作り得たものとは考えられない。

⑧ <四料簡れうけん> the four moments とは禅宗哲学の根本理念である因縁弁証法 (cf. 本稿 9 [4][5][6]) の成立すなわち得果に無くてはならぬ四種類の dynamic moments すなわち契機けいすなわち機用きゆうのことである。臨濟義玄禅師のいう<奪>ウバウは<止揚する><揚棄する>の「止」または「棄」に相当する語であり、<人>とは<意識の主体> = 対自のこと、又<境>とは<意識の客体> = 即自 = 扱ばれた行動環境のことであるから、本稿 8 [5] 所載の力学的合成の図解についてこれを見ること。



④ (一) 奪人不奪境 (the single negative moment) とは優勢なる意識の客体の力が比較的劣勢なる意識の主体の全体統合 integration を越える力を止マタハ棄シテ主客一枚の心境=実存数学のゼロ=無を意識の内奥に開發する禪者の悟境を云う。(イ) 本稿10㊦(o) <八月涼気至>を以て始まる漢詩を見て下さい。かくして因縁弁証法の成立=因・縁・得・果・=因・果・を現象するのである。

人生金石にあらず
物に随って意自ら移る
誰か能く一隅を守り
兀^{わう}々の鬚に糸を垂れんや

という詩的表現は真にソノモノズバリの表現ではありませんか。(ロ) [本稿10㊦(d)を見よ], 亦10㊦(e)の短歌を見よ, 作者は<奪人不奪境>の契機に由って読者と共に<色即是空即是色>の妙境を開發しようとしているのではないか。但し<奪人不奪境>の契機においてはイニシアチーブをとるものは常に<境>=意識の客体=トポス = OX' の起爆力であり, <信行>の力であり, 西田幾太郎先生のいう <場所の論理>別名 <述語の論理> も, プラトンが現象界を説明するために実在の原理 = アイデアのほか^{トポス}に設けた非実在^{メーオン}の原理 (彼は主原理アイデアと副原理メー・オンとの結合によってすべての個々の存在は現象するものとしたのも, みな意識によって意識される意識の客体 ^{ネガチーブ}topos = OX' の自己否定的な起爆力を指さすものだとわたくしは考えておる。この契機を<奪人不奪境の料簡>と名づけて因縁弁証法の論理の成立する四つの契機の一つだと見た 臨濟義玄禪師^{インサイト}の直覚力には, わたくしも畏れ入った。もちろん, 臨濟のいた頃には因縁弁証法 (これを筆者は the ideo-topological dialectics と反訳しているのであるが) と云うことばは無かった。彼は人間という自覚存在すなわち実存が悟りに入る四つの契機ぐらいに考え, 参禅者らの <サトツタカ, ドウカ 'tallied or not' これは Whitman の用語> 又もし悟ったとするならば <何のような契機によって悟ったのか> ^{ものまじし}これをテストする尺度として用いたものに過ぎなかったであろうと筆者は考える。これによって禪者の悟入すなわち真理受肉の経験を実存分析にかけて見ると, 葛藤集第26則にみえる <香巖撃竹> の故事 [本稿9㊦を見よ] などは明らかに奪人不奪境 (人ヲ奪ウテ境ヲ奪ハズ) の契機による真理受肉の体験だとわかって来るであろうし, 友だちの一人と共に雷にうたれて友だちは絶命したがルーテ

ルだけは道路の上に蘇生した時突如として大悟した彼の宗教的な不思議な経験も亦奪人不奪境の契機に由る真理受肉のケースだと判明するであろう。熱心なユダヤ教者であったパウロがダマスコまでキリスト者迫害の手をのぼそうとしてダマスコへゆく途中で復活したイエスの声を聞いて急に前非を悔いて180度の回心をしたパウロの深刻な宗教的経験も、彼の聞いたイエスの声が、事実であろうと幻覚であろうと、彼の意識に意識された意識の客体＝トポス OX' の自己否定的起爆力であったのだから、パウロの場合も矢張り奪人不奪境の契機に基づく悟入のケースだと見なければならぬ。因みに云う、マルクスの唯物弁証法においては奪人不奪境の契機のみが、しかも <境> の意味を著しく限定された奪人不奪境の契機のみが承認されている。

④ (二) 奪境不奪人 (the single positive moment) とは意識の客体 OX' の契機＝プラトンのいう <メー・オン> = 西田先生のいう <場所の論理> = サルトルのいう <即自の逆行率> を意識の主体 OX の力すなわちサルトルのいう <対自の無化率> を以て完封して実存分析的両面価値性をこれに定着されたエネルギーを喪失させる事によって無力化して、これを己れとともに (OX+OX') の合成線上に止揚する主客一枚の端的である。〔逆行率及び無化率については本稿9回を見よ〕それ故、奪境不奪人の契機すなわち機用においては、奪人不奪境の場合とは反対に、意識の主体 平たくいうと靈魂 soul の力がイニシアチブをとる因縁弁証法的な(超出ではなく)、超入であると了解するべきである。良寛禪師も坐禅念仏することによってしばしばこの種の契機による即自の中の内無に向っての一超直入菩提地を試みて居るばかりでなく、<騰々天真に任す> と称して何もしない無為無作の姿勢で外部からの苦痛を無化 néantiser し——かくして自己を選択 se choisir し、自己を制作 se faire する自由を享受して居ることがしばしばあった。例えば、(イ) 本稿9 (b) に掲げた <生涯身を立つるに懶く> を以て始まる漢詩、あのすばらしい漢詩を閑かに味読してごらん下さい。(ロ) また本稿10回(f) に掲げた <青天に寒雁鳴き> を以て始まる漢詩や、(ハ) 本稿10(i) に掲げた <総て世用に疎きが為に> を以て始まる漢詩も同じポジの系列に属する彼の作品である。<存在するとは、対自がそれであるところの即自を無化することである。さすれば、自由とはかくの如き無化作用以外の何ものでもない。> というサルトルの言葉〔cf. Sartre : L'être et le néant, p. 515〕をわたくし達はここで十分に味ってみたい。それと同時にわれわれは今から凡そ1,100年も前に臨濟義玄禪師 (?-867)によって打ち建てられた禅の実存哲学のいかに精緻を極めたものであったかに目覚めなくてはならないと筆者はこの頃つくづくと考えることである。つ

いでながら、筆者が〈騰々任天真〉という原詩第2句を〈But as cloud and air I'm free,〉と意識したのは、サルトルの力説する自由の意味とホイットマンの〈this is thy hour O soul, thy free flight into the wordless,〉という表現と両方を踏まえての訳出であるをご了解を願いたい。〈thy free flight into the wordless〉をサルトル氏に訳させてみたら〈無に向っての汝の自由なる投企〉と反訳するかも知れない。本稿10 [c]にかかげた短歌も作者の新たなる〈free flight into the wordless〉を試みようとする姿勢——仏教者のことばで云うと、新たる決意をもって〈精進〉しなければならないという心構えを表現したものと筆者は考える。まだ少年であった舎弟由之に倒産に瀕した名主山本家の万事を委ねて自分は何食わぬ顔をしてお寺へズラかって、雲水になったわけだが、これ位いの精進ぶりでは弟に対しても世間に対しても申し分けがない。わしは雲水としての責任を果し、外部からの苦痛を無化して早く自由の身になりたい、否々なるべきであるという自戒の念を表現したものだ、わたくしは思う。作品としては別に秀れたものとは思わないが作者良寛の両面価値的な実存心理学的コンフリクトを明らかにしているので、ここに掲げることとした。

④ (≡) 人境両俱奪(the double negative moment(の契機とは 坐禅や念仏によって<人>=意識の主体と、<境>=意識の客体とを二つながら同時に2Xの→線上のOにおいて止棄される<三昧王三昧>の起爆力^{ざん}をいう。所謂<無作ノ妙用> <天真ノ作用>とはこのことである。道元が<いはんや経教はながく見るべからず、もちゐるべからず、ただ身心をして枯木死灰のごとくなるべし、破木杓、脱底桶のごとくなるべし>と云い、<心身脱落、脱落身心>と述べている意識の内奥にひそむニヒル = 無に向っての超入^{イデア}の力を契機として永遠者が人間存在の時間の世界にコンタクトする瞬間の絶対境をいう。4) <うらを見せ、おもてを見せて、ちるもみち>という良寛禅師の遺偈に見る悟境は、このような<人境両つながら俱に奪う>ところの天真の妙用 = 真空の妙用によるものであって、これは禅師のように念仏に兼ねて坐禅の修業を、根気よく続ける者でなければ容易に身に着けることの出来ない主客一枚の境界である。とかく凡夫のわれわれは有為(無為の反対)の四相に妨げられて、修業 = 客体と、証悟 = 主体とがチグハグになって、<修証一如> <主客一枚>の妙境にまで吾々を lead up してくれる <天真の作用> <無作の妙用> という double negative moment は、有り得ないわけでは無いがなかなか得

がたいものである。法然や親鸞の悟境も亦この様なものであった。そこで坐禅宗の雲水たちは昔から南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏して常住坐臥法然の姿勢にまで自分を呼びもどそうとして自己否定^{ネガティブ}的な努力をしたものである。われらの良寛もその例しに洩れず、彼は自力宗の信者か他力宗の信者かわからない程に時には浄土真宗の信者の家に〈信宿〉をして坐禅もし念仏もしたものであった。いよいよこの非凡なメンデカント＝托鉢僧＝乞食僧は禅師と呼ぶべきか？ 上人と呼ぶべきか？ 空也上人や一遍上人のように民衆に親しまれ、民衆に愛され、好んで民衆に馴じた聖（ひじり）であるから、むしろ良寛上人と呼ぶべきか？ とも思われる。しかしイタリヤのアシジのフランチェスコさま(1181—1226)を連想させる日本のこの傑僧は或いはこれを単に良寛さまと呼称するのが当を得ているかも知れない。禅師というと、多くの人は臨済門の棒喝して参禅者を接得する超仏越祖のコワイ禅師たちを連想するので、この子供を愛し、その親たちに親しまれた托鉢僧を呼ぶには応わしくない。

④ (四) 人境俱不奪 (the double positive moment) とは、例えば一枚の紙の裏も表も積極的に出力せしめて人間存在の全体の機用を誘発して永遠者を時間の世界に瞬間的に触接せしめる人間存在最大の超出的起爆力である。この契機によって到り着いた三昧^{さんまい}こそまことに〈三昧王三昧〉の名にふさわしい最勝の境涯である。臨済禅師の頌に曰く〈王宝殿に登り、野老謳歌す〉と。うべなる哉。けだし〈王〉＝イデア＝因、〈野老〉＝トボスの論理＝縁である。〈洞山五位〉と較べてみると〈第五、兼中到〉の位にあたる具足円満の境涯であるから、サルトルがいうように、人間の現存在がこの位にまで〈本来的な実存(即ち本来の面目)にめざめ、日常的な平凡さから遠ざかり、より十分な独自の起爆力を誘発するためは、〈人境俱不奪〉〈兼中到〉の契機による三昧を得て尚かつ己れのもちうる最大の可能性をもとめて永遠者＝イデア＝絶対の無に向って自己を投企 * se projeter するよりほかに手は無いのだ。〉というサルトルの所説の意味するものが此処でわたくしに初めてよく解って来た。ばかりでなく、洞山良价禅師のいう〈第五兼中到〉(Both ox and ox' positive getting into the middle line 2x.) という dynamic term の端的に初めて気が付いたものである。良寛のすぐれた作品は概ね double negative 又は double positive の機用による所謂〈三昧王三昧〉の妙境にアプローチした場合の作品である。

* 禅門ではこれを〈躑跳仏地〉(仏地ヲ躑跳スル)と云い、たとい修行を積んで自分に可能な悟りの最上の段階に進んでも、その段階にいつまでも止まっていると

＜己到住著＞の病気になるので可及的屢々大きくとび上って自分の^{レコード}限界状況を突破すること。サルトルが＜己れの人格の唯一性に到達するためには……＞という処が本稿6のトップに掲げた＜道元の遺闕＞の中にある＜鐘の事跳を打し大千を触破す＞に契当するソノモノズバリの表現である。よくよく考えてみれば、白隠禅師の＜尋常一樣窓前月、纔有梅花又不同＞という大燈国師のことばへの著語、亦これに触発されたものと思ほしい蕪村の辞世の句＜しら梅に明る夜ばかりとなりけり＞などが時空をへだててサルトルのこれらの語と相照応している壯観はまことに得も言われぬ荘嚴である。サルトルは無神論者だ、仏教は汎神論だからお話しにならないなどと回心前のパウロと同じように精神的動脈硬化症即ち＜己到住著＞の病気にかかった多くのキリスト者らにきかせたい声がある。パウロがキリスト者迫害のためにダマスコへ急ぐ途上で聴いた＜復活したキリストの声＞と同等の効きめのある二つの声がある。その1は、神はあまねく現前する無限な主観であり、決してまなざしを向けられることのない「まなざしを向ける存在」である、というサルトルのことばであり、その2は、碧巖集第1則にみえる＜梁の武帝、達磨大師に問う、如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。＞という文章のあの最後のことば、達磨が武帝の間に答えた^{かくおんむせう}＜廓然無聖＞“the absolute nil that is holy”という語である。但しこの達磨のことばを十分に理解するためには、神とは人間の対自がそれである所の価値意識があとからはたらく＜冥想＞によって、世界のかなたに、超越者として、おのれ（即自）の中に内在者として、実体化したものである、というサルトルのことばに参究する必要があると思う。

⑤ 最後に、74才で示寂した良寛が自分の孫のような貞心尼を相手に生涯の最後の5年ばかりの間に開発した莫大な可能性＝＜空愛＞の経験については、葛藤集第154則＜^{はす}婆子焼庵＞の公案に言及しながら、騰騰兀兀と湧き上ってくる泉の如く因縁弁証法的自己投企の非連続の連続＝不易流行（芭蕉）の中に人間という自覚存在、人間という自由な而も次第に成長し次第に充実してゆく良寛と貞心尼と二つの生活体を中心となって放射する星雲のリングのようにおぼめいて光るハロ（halo）——あの^{たまきわ}魂際るところの美しさを、あの＜空愛＞あの＜the light of life＞（2 Cor. 4. 17）の exquisite beautyを、＜歌やよまむ手まりやつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつつ＞という良寛の歌と＜うたやよまむ手毬やつかむ野にや出む君かまにまにな

して遊ばむ> <君なくば千たび百たびかぞふとも十づつ十をもと知らじを>という師尚にくらべて43才も若い美貌の貞心尼の歌とが相反映してそこに現象する冬の虹を見るような美しさについて、特に貞心尼の後の歌の‘de profundis’!と叫びたいほどの物深さについて詳述したいとは思ふけれど、筆者に与えられた紙面が殆ど尽きたので、最後にもう少し。

⑥ 貞心尼のこの歌が、君なくば千^ちたび百^{もも}たびかぞふとも十づつ十を百と知らじを、といふ歌の意味が、

How often often you and me
were at the handball game
And counted 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10
ten times……
Should be 100, should be nil,
For all my thoughts, without you, my dear,
I ocouldn't realize, O ne'er!

という歌の本当の意味が、全体は部分と部分の加算的総和ではないという事の意味が、at onenessの真底が、もしもあなたに悟れたら、

腹にこたえて分つたら、身にシミシミてわかつたら、いまここで直下^{じきげ}に公^みすること
ができれば、あなたは真理受肉ができたのですよ……

君死に給ふことなかれ……晶子の歌の真底が……鎌倉やみ仏なれど大仏は美男におは
す夏木立かな……のぎりぎりの意味に参究することができるでしょう……からかぬ
の大仏さまの如来肌の温みを夏木立の下に感じとることができるでしょう……晶子
の歌がセンチメンタルにしか響かないカナツンボなんかギリギリ Go to hell!
だ。アルトのばりばりの喝ツ!だ。<雲門一棒>の一棒のヒシツだ。

⑦ <婆子焼庵>の公案に曰く、昔婆子^{はす}あり、一庵主^{ばあさん}を供養して二十年を経たり、
常にひとりの二八の女子をして飯を送って給侍^{あるひ}せしむ。一日女に抱定^{だきつか}しめて曰く、
正与麼の時如何?主曰く、古木寒巖^{せうよも}に倚る、三冬暖气なしと。女子帰^{ほうぞ}って婆に挙す、婆
曰く我れ二十年ただ箇の俗漢を供養し得たり、〔なさけなやとて〕ほうずを遣^おいだし

庵を焼却すと。

⑧ おもうに、この公案を解く鍵は、貞心尼のこの歌にある。貞心尼のこの歌の公案を現成 realize する秘訣は肉欲をアイデアの光に当てて <空愛> に——いのちのひかり ‘the light of life’ に合成する因縁弁証法 *ideo-topological dialectics* の機用 moments を悟得するべくキリスト者は神の前に沈黙を守ること、できるだけ屢々 keep silent before Him すること。仏教者はできるだけ屢々立ったままで或いは坐ったままで坐禅をすること、念仏をすることが肝腎である。かくすることに由ってあなたは仏智 Panna を得るでしょう。神智 Wisdom を得るでしょう。命の光を得るでしょう。内日さす魂のおだやかな光の中に立つでしょう。その時あなたは大力のかなしみを得るでしょう。空愛とはそんなものです。空智とはそんなものです。私のいう活性エネルギーとはそんなものです。禅機といい禪定力というものそんなものです。とぼけたことを言う雲水が居ると <喝ッ!> と男性ソプラノの大声をあげて叱呼して師家が愛する弟子達を時々は喝棒でぶッ打いてまで接得するのにも内に多量の空愛の活性エネルギーを蓄えておるからです。カトリックのお坊様が荒縄を腰にぶら下げているのをあなたは見たことがありますか。

⑨ 良寛さまは芭蕉さまと同じように烈しい下痢で亡くなった。その時貞心尼は終始付き添ってねんごろに介抱し、下の拭きとりにまで親切をつくして看病した。<良寛さん、いい気持がしたろうや?> と云う人が居る。わたくしできへく喝ッ!> と大声でおらびたくなる。そして婆子焼庵のばばさんのことを思いだす。内日さす魂の光を持たない人達のあわれさ!

⑩ お師尚さま、あなたとあたしとたった2人で、まッ何べんお手毬を一赤と黒、紅と青とのお手毬を一コレハワシガノ、ホンニワシガノとお師尚さまの大好きな毬ッ子をヒイ、フウ、ミイ、ヨ、イツ、ムウ、ナナ、ヤツ、ココ、トーヨ……

ひい、ふう、みい、よつ、いつ、むう、なな、やつ、ここ、とーよ……

トト、トト、トト、トント、トント、トント、トント、トント、トント、トント……
十が十で百よ、これで一貫貸ッしまッしたと まッ何べんお手毬について遊んだことでしょう

でも、お師尚さま、お庇さんで、十を十が百やァないの、十が十で〇(まる)よ、ほんとは円よという分けが……

良寛さま、あなたに^{さと}覺らせて頂きました。

ああ、あたし、涙で、両手がびっしより、ぬれました。

Ⅱ という貞心のこの歌の意味が受肉できたら、ほんとうに貴方は自由になれるでしょう……ほんとうに貴方は心ニ^{めう}開明ヲ得ルでしょう……ほんとうに貴方は靈と肉とが一^{よう}空愛と肉欲とが、ひとつの○になって来る^{ぬく}如な大日如来の肌の温さ多し^{ぬく}みじみと感じ取ることができるでしょう……

ハンブルグの博物館にあるイソノカミフル^{からかね} エジプトの精銅の小猫の肌の温さに触れるでしょう……

アラタフト、アヲバワカバの日光の甚五郎が作ねむり猫のふしぎな言葉が分るでしょう、神に^{つく}創造られたすべての物の……山川草木虫^{しやく}土石のふしぎな言葉が……ふしぎなロゴス (logos) が分るでしょう……すべての国のことばの原の意味と今の意味とがしみじみと解^とけて来るでしょう……聖者の、詩人の、芸術家のロゴスが解るでしょう……自由に人間のことばをロゴスに変えて話せるでせう

いそのかみふるバビロンのバベルの塔の天ツ辺に昇りついたノアの孫子の人々が始めに話したロゴスが……始めに語^{しんごん}った真言が……チンブンカンブン解らない……あの jargon になるまでの^{もと}原始のことばがわかるでしょう。

そしていかに又あの人たちが天への門なる高塔のトップからぞろぞろぞろと地球の面にホロけて落ちたか? 落ちて諸国へひろがったか?

いや、あのトップから <不住^{ねはん}涅槃> のこの娑婆へ上ぼって来たか? この娑婆へいやき昇天したんだと云われているが、そのわけが分って来るでしょう……

涅槃ニ住着スルナカレ……マハヤナの仏教のことばが本当にわかって来るでしょう……命の光のとぼされる有余の涅槃のこの娑婆へ無余の涅槃の天国から上ぼって来た……いやまッホロけて来た……上^{うよ}求^{おはん}菩提……往相の回向へという^{こと}言^{もと}の因^とがわかるでしょう……コトワケノカミに……一言^{ひとこと}主^{ぬし}の神さまに訊ねなくても分るでしょう……創世記11章……神の国なるバビロンの神……よき香のする shinar の……反魂香の homa を焚くバベルの町……天門の町の高塔のハベルの塔を……神門のバベルの塔と呼ぶコトノモトをわかってくれるでしょう。

そして貴方は……魂消ては不可せん…アメリカの国ペンシルバニヤ州の Gettysburg という小さな町に <国際宗教連合> の本部を……タジ・マハールの靈廟にまねて

建設することを思い立つでしょう……ジョンソン大統領を説きつけて……700億ドルの軍事予算を0ドルにうち切って世界の各国の首都に連合支部のガランを建てることに踏みきらせるでしょう

そして世界の国々の各宗門の信者らを亦不信者らをもれなくこの連合に加入することを勧めるでしょう……毛沢東もホオチミンもプレジネフもみんなお入りと言うでしょう。そして世界平和に自己を投企するでしょう……

se projeter するでしょう。

12 貞心尼も亦良寛の指導をうけて熱心な禅者であった。日々バベルの塔のトップに登って上求善提の行をした。日々バベルの塔を下って下化衆生のくらしに自分を投げだした。よき歌を作ることが、そして世道人心を化導することが、彼女にとっては化衆生の主な手段であった。果して彼女はその作品の真底を味いうる人々にシビレル程の感動を与えた。ここに一々挙げえないことは実に残念である。良寛の作品の多くのもが彼女の努力によって今日まで保存された。彼女の筆によって良寛の肖像が今日にまで伝わっている。人間にはそれぞれにカテイノジヨウや一身上の都合がある。場の論理がある。特殊な行動環境というものがある。〈縁〉というものがあるからこれにアイデア（これは単なる観念ではない）＝神やほとけの力＝〈因〉の力を加えて、二つの力を合成して得た真如の……full-truthの活性エネルギーで……空愛のエネルギーで価値ある仕事をするのが……〈随縁真如〉の仕事をして……自分にとって一番勝手のよしいシゴトをして大胆に、率直に、人に怪しまれても少しも怖れることなく生きてゆくだけの自信をもつことが肝腎である。坐禅はそれに必要な胆力を……大力のアイデアの、神や仏やドラゴンの活性エネルギーを自分のからだに受けとめるための黙禱である。坐禅＝to keep silent before Himに外ならない。そのためには自分のペースに一番合った方法で日々百変くらいお百度をふんでバベルの塔の天辺に昇って亦地上に降りてこなければならぬ。自分のペースを人に笑われても驚くな。怖れるな。ビクともするな。

鷹はとび、すずめは雀、さぎは鷺、
からすは鳥、何が怪しき。

（良寛）

Kite is kite, sparrow's sparrow, eglet's eaglet, crow
is crow.

What for do they stare at you and me?

シビれるほどの力が、vita-energy が、この歌をよむ者にドカンと来るではないか。こんなのが禅者の大力の文学である。貞心尼に <山がらす、さとにいゆかば、子がらすも、いぎないて行け、羽よわくとも> と誘ひをかけられた時の良寛の返歌である。何ノ遠慮ガイルモノカという師尚の返事である。誘いをかける弟子も弟子なら、師尚も師尚である。良寛は貞心をつれて町へでると町の人たちがボウズカンザシたアこのことじや。あれを見い、あれを見いというて二人の空愛者の couple をじろじろ見るかも知れないという自分らの抑圧された心配をこの歌でけっ飛ばしたのである。

㊦ 道元は(イ)多くの雲水たちを接得すること、(ロ)多くの著述をなすことに由って彼独特のペースでバベルの塔を降りてきて世に交わることができたが、良寛はホイットマンやステブソンと同じように屢々旅をすること、遊行すること、托鉢すること、信宿して常民と酒のみ煙草をすいすい人々を意化している大力の文学の制作することに由って衆生を化導している。その宗教的な教化への情熱の烈しさは、<誰か問わん迷悟の跡ノ何ぞ知らん名利の塵> と喝破することに、また

いかにして、人を育てむ、^{のり}法のため

こぼす涙は、わが落すなくに。

Tears, tears, tears,

How could I bring up folks?

I shed my tears for religion—

For th' good of all the souls.

(Ryōkan)

わが袖は、涙に朽ちぬ、小夜ふけて、

うき世^{おか}の陸^{のり}の、ひとを思ふに。

(良寛)

Dropping tears on tears,
Late at night, in both hands
How I wept and wept for folks
On the face of all the earth!

(Ryōkan)

とうとう処にも十分に表現されている。筆者も彼と似た経験を坐禅中にくり返したことがあるので特に感銘が深い。道元と同じように良寛もひんぱんにバベルの塔を上ったり下ったりしている。否、かれらの悟境は空中無相の涅槃から一所不住の涅槃にまで瀕繁に level up されているのである。〈度シ度シー一切ヲ度シタル時ニ菩提ハ成就セン〉と般若心経にある。宗教者は他者を度せんとする時、又度したる時、必ず熱心に祈るからである。必ず禅定を励むからである。しばしば念仏するからである。それを怠ったならば、彼等のいう所は神のことば logos にならない。真言にならない。仏の金口から出た言葉にならない。如是我聞一時仏在舎……と云うて尊ばれる程の、万人を動かす程の、その人が涅槃に入った時にはすべての人すべての獣、否ゴキブリまでもが、その人の亡き骸のまわりに集って泣いたと云われる程の活性エネルギーをもって居ない。それはギリシャ神話のイクシオンの巨きな車輪のようにカラマワリするだけだ。いくら廻転しても粉もひけない。ジウノウも抱かれない。公明党は別として日本のすべての政党者よ、よくききなさい。共産党者すらも例外ではない。あなた方には清烈な〈空愛〉がない。菩提薩陀の愛しみがなく、悲しみがなく。あなた方の被仰おつしやることは仮性真理ではあるが活性真理ではない。マルクシズムの社会科学はそれが人文科学である限り仮性真理である。自由主義リベラリズムはそれが政治学という人文科学の原理である限り仮性真理たるを免れない。宗教から政治は解放されなければならぬと被仰るけれど、宗教者はキリスト者も仏教者も踊る神様の信徒もみんな国民の一部ですぞ。かれらと雖も他の市民と同じくその意見を日本の政治に反映させる義務と権利がある筈である—かれらが有産者であろうと無産者であろうと、又かれらが主流派であろうと反主流派であろうと。天竜寺を建て多くの兵隊を信服させた尊氏。巖島神社を建て音戸の瀬戸のカナルを掘った清盛などの反主流力者の政治を支持した者は少くとも不信者ばかりではなかった筈である。中共の毛先生にも同じ苦言を呈したい。あなたは〈活学活用〉と被仰るけれど学習を活学となし利用を活用に転ずるだけの

活性エネルギーの供給源をあなたは何処で見付けるお考えですか？ 物質の生産力を何程向上させても人はみなパンばかりで生きる者ではないから国民の健康は保障したい。不健康な国民をいくらとなりつけて活学活用に志向せよと申されても永い目でみるとそれは驚馬に笞打つと同じ結果になりはしないか？ あなた方は民主主義民主主義と被仰るけれど貴方の政治に国民の各層が代表者を送っていますか？ 紅衛兵による人民裁判に壁新聞に言論の自由は鼻糞ほどもないではありませんか。この状では活学活用はおろか物質の生産力にすら行き詰るのではないだろうか。ベトナムの人民も可哀そうですが、あなたの国でもあなたの曾ての偉大な同志達の自殺が相次いで行われそうだ。反主流実力派の兵隊がたくさん戦死している。それでもあの人たちに対して人間らしい愛情＝manly love (Whitman)を持つことができませんか？ 自分と意見のちがう者を一体何人殺したら真理に到達するお見込みでしょうか？

㊦ そこで真理受肉者の〈空愛〉‘magnetic’ love, ‘magnetism of sex’ (Whitman) — 磁場に小さな鉄片や鉄粉が抱き合って密着しているのを見るような静かな、統制力のある、自分の場に密着して離れようとしな、あのマグネチックな清烈な愛情の受肉なくして— 自覚なくして政治を文学を芸術を社会科学をマス・メディアをマス・ムーブを学校の教育を学校のストライキを論ずるものあわれさよ！という結論に到着する。そこで芭蕉と寿貞、良寛と貞心尼の徹底的な実存分析が大きな重要性をもつ研究となって来るのである。

㊧ 山鳥里ニイ往カバ子鳥モ……とうたい、鶯ハ鶯雀ハ雀……何が怪シキと返した二人の間には— 若い美貌の貞心禪尼と年老いた良寛禪師との間にはシビレルような空愛が冬の虹となって美しく架っているのを私は見る

あもきら
天霧う冬の山より立つ虹の
いろかが
七彩耀よひて凍る一刻

(大槻岐美)

O stand and stare just now
At seven huéd sainbow there
As spannéd cold o'er the* dale
Between the snowéd foggy peaks!

* Pronounce this as th' with its e quite obscured.

という歌の印象がその時私の頭にこびりついて離れない。良寛と貞心は、芭蕉と寿貞は、あの虹の下で結ばれたのだ。あの虹の下でブレイクがいう様に天国と地獄が結婚するのだ。あの虹の下で、あの光うるわしいアイデアの虹の下で、霊と肉とが合成されて二人の空愛 = magnetism of sex が生れたのだ。光うるわしいアイデアのあの虹の下で、貞心尼よ、あなたは白髪のお師尚さまと一い二う三い四う五つ六う……赤い手毬をついたのだ。お師尚さまが亡くなっても明治5年75才で死ぬる迄あなたはあの手毬の音を心の中で聴き続けられたことでしょうね。わたくしはあなたという人がなかったら何としても <婆子焼庵> の公案を一あの難透の公案を透脱することは出来なかったでしょう。合掌黙禱。あなたという人がなかったら、Whitman のいう manly love = 自然及び人生に対する人間ラシイ愛情の意味が十分に解らなかったかも知れない。